４　「百人一首」 ─近世の和歌注釈書

21年度　学習院大学

★　次の文章を読んで、後の問題に答えよ。

　、和泉大将藤原のア随身たり１し時、或る夜、定国酒に酔ひて左大臣公のへ２深更に及びて参られければ、師尹公驚き怪しみ給ひ、いづくへ参られたるついでに立ち寄られたるぞとａ仰せられて少しに見えける時、忠岑定国卿の供にてありけるがイ松明を持ちながら階下にひざまづきて、

　　の渡せる橋の霜の上をウ夜半に踏み分け３ことさらにこそ

と詠めり。この歌の心はかのエ家持の歌の「鵲の渡せる橋に置く霜の」といふを本歌にして、この方の主人がかやうに霜の降りたる上を、夜中に踏み分けて参り候ふは他へ参りしついでには候はず、この御館へわざわざ参られｂ候ふなりといふ心なり。師尹公これを聞かせ給ひて、忠岑随身としてかやうに主人の事をよき様に取りなせしを①感じ給ひ、夜の明くるまで酒宴し給ひ、その上定国にも忠岑にも引出物４賜りたる由、　 Ｘ 　に記されたり。

　この和泉大将は近衛大将にて、召し連れｃ給ひし忠岑は近衛の随身なり。弓矢を帯して御供に参りしなり。近衛を歌には「近きり」と詠めり。　 Ｙ 　のに、「かくはあれども照る光、近き衛りの身なりしを、誰かは②秋の来る方に、欺き出でて」と詠めり。衛門は禁門を衛り近衛は禁中のを衛り、天子を近く守護し奉る役なり。忠岑左近衛の番長なりしを、後に衛門のとなされたる事を憤りて詠めるなり。「誰かは秋の来る方に、欺き出でて御垣より、外重オ守る身の御垣守」と詠まれたるは、この衛門の府生の陣はなる故なり。番長は後撰集にも「左近のつがひのをさ」と書けり。これは左右合はせて十六人あるなり。忠岑また年中禁中の歌合に「５有明のつれなく見えし」といふ歌を詠まれしに、帝深くその歌を喜ばせ給ひ、御随身にんでつひに昇殿を許されにぜしめ、③・らと共に　 Ｙ 　をぜしめ給へり。忠岑かつて和歌の十を定められし時、貫之を先師のと書かｄれたれば、歌は貫之の弟子なりけるにや。土州刺史とは貫之土佐守なりし故なり。後代に至りて、後鳥羽院　 Ｙ 　の中の秀歌はいづれならんと近臣に尋ねさせ給ふ時、④定家・家隆両人ながらこの「有明のつれなく見えし」と詠める歌を、第一の由ｅ奏せられしとぞ。忠岑長寿を保たれて二年までながらへ、九十八歳にてみまかられたり。

（注）　忠岑＝平安時代の歌人。

定国＝平安時代の官僚。

師尹＝平安時代の官僚。

鵲の渡せる橋に置く霜の＝下句「白きを見れば夜ぞ更けにける」（新古今集・巻六・冬・大伴家持）。

閤門＝内裏の内郭の門。

府生＝六衛府の下級幹部。

誰かは秋の来る方に、欺き出でて御垣より、外重守る身の御垣守＝「誰でもないこの自分自身が西の方の右衛門に移されて、御所から外の御門を守衛する衛士の身になってしまったが」の意。

後撰集＝二番目の勅撰和歌集。

延喜＝西暦九〇一～九二三年。

御書所＝宮中で書物を管理した役所。

刺史＝国守の唐名。

康保二年＝西暦九六五年。

問１　傍線部ア～オの漢字の読みを平仮名の現代仮名遣いで、それぞれ答えよ。ただし、アは音読み、それ以外は訓読みで答えよ。

　　ア＝［　　　　　　　　　　］　イ＝［　　　　　　　　　　］

　　ウ＝［　　　　　　　　　　］　エ＝［　　　　　　　　　　］

　　オ＝［　　　　　　　　る　］

問２　空欄Ｘには歌物語の作品名が入る。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　大和物語　　２　うつほ物語　　３　狭衣物語　　４　竹取物語

問３　空欄Ｙには歌集名が入る。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　万葉集　　２　古今集　　３　拾遺集　　４　千載集

問４　傍線部１「し」の終止形は何か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　き　　２　し　　３　す　　４　せ

問５　傍線部２「深更」の意味として、最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　深刻　　２　真剣　　３　深夜　　４　緊急

問６　傍線部３「ことさらにこそ」の後に略されていることばは何か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　のたまひたれ　　　２　参りたれ

　　３　あはれなりけれ　　４　遊びたまはれ

問７　傍線部４「賜りたる」を、左の例のように単語に分解した上で、活用形を答えよ。

　　（例）　未然形　終止形

　　　　　　すすま　ず

　　［　　　　　　　　　　　　　　　］

　　　　賜　　　り　　　た　　　る

問８　傍線部５「有明のつれなく見えし」は、「別れより暁ばかり憂きものはなし」と続く。「暁ばかり憂きものはなし」の意味として、最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

　　１　暁ほどつらく感じられるものはない

　　２　暁になるとつれない恋人が待ち遠しい

　　３　暁にはもう月を見るのは気が進まない

　　４　暁だけは誰のこともうらめしく思わない

◎問９　本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選べ。

１　師尹は、酒に酔ってやって来た定国が本心では嫌だったが表面上は歓待した。

２　定国は、忠岑が「鵲の」の歌を詠んだのを出過ぎたことだと不愉快に感じた。

３　定家・家隆は、「有明の」の歌を衛士の身を思いやったものとして高く評価した。

４　忠岑は、貫之のことを先師と記していたので、貫之に歌を学んだのかもしれない。

【確認問題】

１　□ａ～ｅの敬語の説明を、次のⅠ～Ⅲの語群からそれぞれ選べ。なお、同じ記号を何度用いてもよい。

　Ⅰ　敬語の種類

　　ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

　Ⅱ　本動詞・補助動詞・助動詞の区別

　　ア　本動詞　　イ　補助動詞　　ウ　助動詞

　Ⅲ　敬意の対象

　　ア　忠岑　　イ　定国　　　　ウ　師尹

　　エ　家持　　オ　帝　　　　　カ　貫之

　　キ　躬恒　　ク　後鳥羽院　　ケ　定家・家隆

　　　　　Ⅰ　　　　Ⅱ　　　　Ⅲ

　ａ＝〔　　　〕〔　　　〕〔　　　〕

　ｂ＝〔　　　〕〔　　　〕〔　　　〕

　ｃ＝〔　　　〕〔　　　〕〔　　　〕

　ｄ＝〔　　　〕〔　　　〕〔　　　〕

　ｅ＝〔　　　〕〔　　　〕〔　　　〕

【補充問題】

２　波線部①「感じ給ひ」とあるが、師尹はどのようなことに感心したのか。適当なものを次から選べ。

ア　忠岑が、酒に酔って出歩く主人を案じ、行く先を松明で照らすなど随身として誠実に仕えていること。

イ　忠岑が、主人の師尹への非礼を和歌によって情趣ある行いのように言いなし、主人の面目を保ったこと。

ウ　定国が、他の誰かの元へ行くついでではなく、ただ師尹に会いたい一心で師尹の御館を訪れたこと。

エ　定国が、家持の和歌を参考にして、夜中に霜を踏み分けて師尹に会うという風流な行いをしたこと。

３　波線部②「秋の来る方」とは、ここでは何を指しているか。本文中から五字で抜き出せ。

　［　　　　　　　　　　］

４　波線部③「貫之・躬恒ら」とあるが、本文では省略された一人として適当な人物を、次から選べ。

　ア　在原業平　　イ　紀友則

　ウ　小野小町　　エ　大伴黒主

５　波線部④「定家・家隆」とあるが、この二人が撰者を務めた和歌集を次から選べ。

　ア　山家集　　　　イ　千載和歌集

　ウ　金槐和歌集　　エ　新古今和歌集

【解答】

問１　ア＝ずいじん　イ＝たいまつ　ウ＝よわ

　　　エ＝やかもち　オ＝も（る）

問２　１

問３　２

問４　１

問５　３

問６　２

問７

問８　１

問９　４

【確認問題】

１　ａ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝ウ

　　ｂ　Ⅰ＝ウ　Ⅱ＝イ　Ⅲ＝ウ

　　ｃ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝イ　Ⅲ＝イ

　　ｄ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ウ　Ⅲ＝ア

　　ｅ　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝ア　Ⅲ＝ク

【補充問題】

２　イ

３　衛門の府生

４　イ

５　エ

【現代語訳】

　忠岑は、和泉大将藤原定国の随身であったとき、ある夜、定国が酒に酔って左大臣師尹公のお屋敷へ深夜になって参上なさったので、師尹公は驚き不審にお思いになって、どこへ参上なさったついでに立ち寄りなさったのかとおっしゃって少し不機嫌そうに見えたとき、忠岑は定国卿の供として（一緒に）いたが松明を持ったまま（寝殿の）階段の下にひざまずいて、

　鵲が渡している（天の川の）橋（になぞらえた師尹様のお屋敷の階段）の霜の上を夜更けに踏み分けてわざわざ（定国様は参上したのです）。

と詠んだ。この歌の真意はあの家持の歌で「鵲の渡せる橋に置く霜の」という（歌）を本歌にして、自分の主人がこのように霜がおりている上を、夜中に踏み分けて参上いたしますのは他所へ参上したついでではございませんで、このお屋敷へわざわざ参上なさったのでございますという意味である。師尹公はこれをお聞きになって、忠岑が随身としてこのように主人の行いを上手に取りなしたことに感心なさって、夜が明けるまで酒宴をなさり、その上定国にも忠岑にも引出物をお与えになった旨が、大和物語に記されている。

　この和泉大将は近衛大将で、お連れになった忠岑は近衛の随身である。（忠岑は）弓矢を身につけてお供に参ったのである。近衛（のこと）を歌では「（天皇の身に）近い護衛」と詠んだ。古今和歌集の長歌に、「このようであっても輝く光（＝天皇）の、近衛の身であったのに、誰かが（私を）秋の来る方（＝西の右衛門）に、欺いて移して」と詠んだ。衛門は内裏の門を警衛し近衛は内裏の内郭の門を警衛し、天皇を近くでお守り申し上げる役である。忠岑は左近衛の番長であったのに、後に衛門の府生とされてしまったことを憤って詠んだのである。「誰かが（私を）秋の来る方に、欺いて移して御所から（離したせいで）、外側の御門を守衛する衛士の身（になってしまった）」とお詠みになったのは、この衛門の府生の陣は宜秋門にあるからである。番長は後撰集にも「左近の対の長」と書いてある。これは左右合わせて十六人いるのである。忠岑はまた延喜年中禁中の歌合で「有明のそっけなく思われた（別れ）」という歌をお詠みになった（とき）に、帝は深くその歌をお喜びになり、ご随身にしてついには昇殿をお許しになって御書所に仕えさせ、貫之・躬恒らと共に古今和歌集を撰ばせなさった。忠岑はかつて和歌の十体をお決めになったとき、貫之（のこと）を「先生は土州の刺史」とお書きになったので、歌は貫之の弟子であったのだろうか。土州刺史と（書いてあるの）は貫之が土佐守であったからである。後世に至って、後鳥羽院が古今和歌集の中の秀歌はどれであろうかと近臣にお尋ねになるときに、藤原定家・藤原家隆は二人ともこの「有明のそっけなく思われた（別れ）」と（忠岑が）詠んだ歌を、第一（の秀歌だ）との旨を奏上なさったとか（いうことだ）。忠岑は長寿を保ちなさって康保二年まで生きながらえ、九十八歳でお亡くなりになった。